1993年12月25日

ペシャワール会報

No.38

- ダラエ・ヌール周辺で悪性マラリア大流行……JAMS
- 停電や断水がある分日本よりまとも……倉松由子
- カラチまでレントゲンの買出しに……豊崎朝美
- 強い陽射しの中何時間も待つ患者さん……林　達男
- 4年ぶりの日本の病院……藤田千代子
- ヌーリスタンの渓谷(1)【インダルの園1】……中村　哲

新聞売りのイサァ＊表紙絵　甲斐大策

ペシャワール会　〒810
福岡市中央区大名一丁目一〇一二五　上村第二ビル三〇七号
電話・FAX　〇九二（七三一）二三七二

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。現地の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

ダラエ・ヌール周辺で悪性マラリア大流行

――緊急アピールに応え全国から15,010,045円――

「220円のキニーネで一人の命が助かる」というアピールに対し、全国津々浦々から一千本以上の電話がかかり、二千人を超える方々からの寄金が寄せられました。寄金はただちに現地に送り現地チームが第2次、第3次の診療・投薬にあたり、「最悪の事態」は回避することができました。ありがとうございます。今回のアピールに応えていただいた方の多くは、ペシャワール会＝ＪＡＭＳの活動を初めて認識されたことと存じます。悪性マラリアの流行は、現地の抱える問題の「氷山の一角」です。私どもの現地活動をご理解の上、継続的なご支援をお願いいたします。(次号にも引き続きご報告します)。

緊急アピール　93年11月3日

◎薬品が切れる

現地では今、マラリアの大流行で深刻な状況です。今年八月を境に、悪性のマラリアが爆発的に増し、犠牲者が続出しています。このためＪＡＭＳ（日本ーアフガン医療サービス）では特別な移動診療チームを組織し、去る十月二十二日から八日間、ダラエ・ヌール渓谷とその対岸地域、約三十ヶ村を対象に、しらみつぶしに村から村へ精力的な努力を続けてきました。

予想通り、聞きしに勝る状況で、十ヵ村・二〇〇〇名の患者を想定した計画は、三ヵ村を残して薬品ぎれとなり、一旦中止、ペシャワールで態勢を立て直して十一月七日より再び開始されます。七ヵ村の診療・調査結果は、ほぼ既述の報告（ダラエ・ヌール診療所）と一致しており、問題の小さくないことを物語っています。

診療は七ヵ村、計約一一〇〇家族（推定二万人）を対象に行ったものですが、結果は以下のとおりでした。

総診療数	一八六三名
マラリア患者治療数	一六三三名
非マラリア例	二三〇名

判断を迷う例・五六六名に対してマラリアの同定検査（ギームザ染色）を行ったところ、陽性者のうち、八九%が悪性の熱帯熱マラリアで、死亡率の低い三日熱マラリアは一一%でした。大抵の住民は「マラリア」について熟知しており、安価で使いやすいクロロキンを殆どが服用していました。にもかかわらず、患者が後を絶たないのは、かなりの耐性が進んでいることを示しています。

◎高い死亡率

マラリアは日本ではごく限られた医療関係者にしか知られていないので、「なぜ今深刻なのか」ここで簡単に説明します。

マラリアには、病気を引き起こす「マラリア原虫」によって四種類があり、全て蚊（ハマダラカ）によって媒介されます。現地で流行しているのは、このうち熱帯熱マラリアと三日熱マラリアです。一般には三日熱が圧倒的に多く、一時的な激しい発熱を除いては余り死亡しません。クロロキンという薬がよく効き、薬に対する耐性も殆どありません。しかし、熱帯熱の方は、全身の血管内に巣くって各臓器を侵し、死亡率が高く、クロロキンに対する耐性の発生も高率です。また、典型的なマラリアらしい症状を欠くので、しばしば誤診されます。今現地で問題になっているのは、たちの悪い熱帯熱マラリアの方で、またの名を「悪性マラリア」とも言います。

治療は、上に述べたクロロキンという薬が服(の)み方も簡単で、安い上に副作用が余りありません。この他にファンシダーという薬も用いられますが、確実ではありません。クロロキン耐性の場合は、キニーネが使用されますが、高価なうえに副作用が強く、近年ではクロロキンが主流を占めてきました。最近安全かつ劇的な効果を示すハロファントリンが開発されましたが、高価なので一般には大量に使用できません。(ちなみに一回の治療にかかる各薬代は、クロロキン・二五円、キニーネ

二二〇円、ハロファントリン・五二五円です。）

◎くり返し感染

疫学的に言えば、二通りの状態があります。第一は「安定相」というべき状態で、地域の成員の殆どがくりかえし感染することによって免疫を持っており、この場合、発病による死亡者は子供や衰弱者だけに限られます。つまり、弱いものは乳幼児期に淘汰され、強いものが免疫を獲得して成人になるので、地域共同体にとっての打撃が比較的少ないのです。第二は「不安定相」という状態で、地域の成員の多くが免疫を持たないときに流行を見るもので、前者に比べて、死亡率が極めて高く、流行も爆発的に起こります。成人も小児も

ヌーリスタンの村で診察する中村医師

侵されて、地域に与える打撃は甚大です。現地は、現在、この「不安定相」にあると言えます。

◎「撲滅」は不可能

WHOがかつて世界各国で行って得た教訓があります。「蚊撲滅」のために殺虫剤を散布し、沼地を埋め、マラリアの薬を行き渡らせ、一旦マラリア制圧に成功しても、別の問題が起きてきます。地域全体からマラリアがなくなると、やがて当然免疫も消えます。そこに新たにマラリアの流行がもたらされますと、第二の「不安定相」に転じ、もっと悲惨な状態に陥るのです。

さらに、多少自然の絶妙な営みを知る者は容易に解るように、地球上およそ数千万種といわれる昆虫の介在する自然の生態系は極めて複雑であり、マラリアの媒介昆虫だけを撲滅するのは不可能で、「自然の安定」そのものに破壊的に作用します。

結論は、「撲滅」など、鳥やよほどの人工的環境を作り上げずには不可能であり、要は適度に犠牲者を抑えながら、地域の人口の免疫を維持する以外にありません。現地で我々の計画するのは、大流行すれば早めにたたいて犠牲者を減らし、再度大流行の兆しがあれば、それをくりかえす。そうして適度の免疫をつけさせてゆくことにあります。

◎帰郷を躊躇

現地は、ダラエ・ヌール渓谷を除けば、約半数くらいのアフガニスタン難民がまだ帰っていません。村でいくら水利工事をしようとしても、労働力が足りず、十分な耕作ができないのです。そこ

＊表紙絵をめぐる小さな物語　1

新聞売りのイサァ

甲斐大策

イサァが地雷を踏み右腕と右足を失ったのは、五年前、ジャラーラーバード市近くの遺跡に仏頭を盗みにいってのことだった。当時イサァは八歳だった。

両掌で抱えた仏頭を凝視めながらイサァは岡を下っていた。仏頭の秀麗な顔は微笑している。くちびるはわずかに紅が残っていた。

「母さんに似てる。」

突然、白い大地と青空が入れ換り、黄色い花に覆われたニガヨモギの草むらと陽光が交叉し、仏頭と自分の頭がひとつになったように感じた一瞬まではおぼえている。

イサァが病院にいる間に両親と祖父母は空爆で生命を失った。三歳の妹と二人残されたイサァは、イスラム導師に従ってペシャワールへ出てきた。

導師はいつもいう。

「五体満足な者達より、失った手足の分だけ多くお前の心は神に満たされている。天国が約束されてるんだよ。」

午前中店の軒先を使わせてくれているインド人の生地屋も同じことをいう。

そういわれるたびにイサァは、天国にいったら義手と義足を貰えるのだろうか、と思う。

最近イサァは、売っている新聞を読めないのが口惜しくて、読み書きを習い始めた。

に致命的な病気の蔓延がありますと、みな帰郷を躊躇します。また、一歩幹線道路を外れると、交通手段がないこともあり、あっても遠くの町まで治療に出掛けうる農民は極めてわずかです。（そのためにこそ、我々の診療所も敢えて僻地に置かれているのです。）交通費・薬品代がわずか千円程度でも、現金収入がないに等しい普通の農民にとっては絶望的な額でしょう。

ＪＡＭＳでは、とりあえず緊急予算六〇万円を薬品代に組んで、「マラリア診療巡回チーム」で制圧に乗り出しています。しかし、六〇万円では二〇〇〇人程度の治療しかできません。ＪＡＭＳの予算が自転車操業の状態で、これがぎりぎりだとすれば、活動停止によって身の毛のよだつ計算をしなければなりません。我々の推定では、ダラエ・ヌール渓谷および関連するクナール河流域だけで、この数ヵ月以内に数千名が死亡すると考えています。そうすれば、さらに難民帰郷が遅れ、悪循環を作ってゆくと予想されます。ひと一人の命が二二〇円かと思えば、やり切れないものです。

我々の活動は、もちろん医療上のものでありますが、周辺区域に測り知れぬ安心感を与えており、これが「難民帰還促進」に与えたものは小さくありません。何とか緊急支援を継続しなければなりません。付け加えれば、今こそ難民帰還・復興支援が必要な時なのに、この地域（クナール）全体でＪＡＭＳ以外に医療活動しているＮＧＯはありません。アフガン戦争以来の「難民援助」のてんまつを思えば、あまりといえばあまり、寒々とした気持ちになります。

最悪の事態回避——持続的支援を！

九月以来、帰郷後のアフガニスタン難民を直撃した悪性マラリアの大流行、そして予想外の日本側の好意的な反応は、考えさせられることの多い出来事でした。ここに甚深の感謝の意と共に、その後の現地事情をお伝えしておきたいと思います。

おしよせる患者でダラエ・ヌール診療所は一時は恐慌状態となり、各村から武装した治安要員を診療所側が要請するという一幕もありました。危機的事態でした。

このためＪＡＭＳでは特別な移動診療チームを組織し、去る十月二十二日から、ダラエ・ヌール渓谷とクナール河対岸を対象に、しらみつぶしに村から村へ精力的な努力を続けてきました。予想通り聞きしに勝る状況で、第一派、十か村・二千名の患者を想定した計画さえ中途で薬品が切れて一旦中止、帰国と同時に日本への呼びかけとなったのです。

その後、寄せられた募金を投じて十一月九日より再開、今なお移動診療チームは活動を続けています。十一月末現在、報告によりますと、主要十四か村で総計三九三九名が治療を受け、ひとまずは恐慌状態を脱しました。現在第三派のチームが、ダラエ・ヌール渓谷の最深部の村々で診療を続けています。さらに、四つのＪＡＭＳ診療所にも豊富に薬品が補給できるようになったので、これを合わせれば優に一万人以上の患者が助かったことになります。

効果はこれに留まらず、村々に良い人間関係をもたらしました。ダラエ・ヌールで厄介なのは家族同士の敵対関係でしたが、我々の活動に住民がこぞって協力する中で、和やかな雰囲気が作られたのです。良心とは力です。「平和」をシンボルに掲げる我々ＪＡＭＳの面目躍如、何かとせちがらい世の中で、まことに愉快なことだと言わねばなりません。

日本は口を開けば「景気後退」と愚痴をこぼし、米国は勝ち誇って、「日本沈没（ニューズウィーク誌）」などとほくそ笑み、まことにツマらぬ世情ではありませんか。カネや武力ではつばぜりあいをする必要はありません。少なくともアフガニスタンにおいて、かれらは道義において敗退しました。彼らはくだらぬ政治的威信をかけて破壊して去り、我々は良心の威信にかけて平和と建設に留まっているからです。

もちろん、マラリアだけが問題ではありません。腸チフス・コレラ・赤痢・デング熱など、他に致命的な病気は現地にたくさんあります。しかし、今回のマラリア・キャンペーンを通して、日本の良心の健在が示されたのは大きな励みでした。活動は何十年でも続きます。現地と希望を共にする輪が更に広がって行くことを祈っております。

（中村　哲）

停電や断水がある分日本よりまとも

ペシャワール・ミッション病院理学療法士　倉松　由子

夏休みが終わって、またペシャワールに戻って来ました。成田から飛行機に乗ってイスラマバード空港に着くと外国に来たと感じましたが、ペシャワールへ向かう車がアトック（パンジャブ州と北西辺境州の境）を過ぎてパシュトゥー語がはばを効かす地域に入っていくと、何だかほっとして、帰ってきたんだと思いました。

❖快適だが居心地悪い

夏休み中は、日本ならではの快適で便利な生活を享受しました。交通機関は迅速で時間通り動くし、店には品物がものすごく多種類揃っているし、停電も断水もなくて、遠く離れた人ともたいていいつでもすぐ連絡をとり合えます。予定をたてればその通りになるし、そうなるように皆が努めています。でも、寒い程冷房の効きすぎた電車や部屋の中にいたり、買い物をしたとき目的物の回りについてくるゴミの捨て所に困ったり、殆どのものが本来の価値を生かされないで使い捨てになっているような中で暮らすうちに、居心地が悪くなってきてしまいました。ペシャワールの宿舎にも冷蔵庫、全自動洗濯機、電気掃除機、電子レンジ、エアコン、ビデオなどがありますが、停電や断水がある分日本よりまともな気がします。

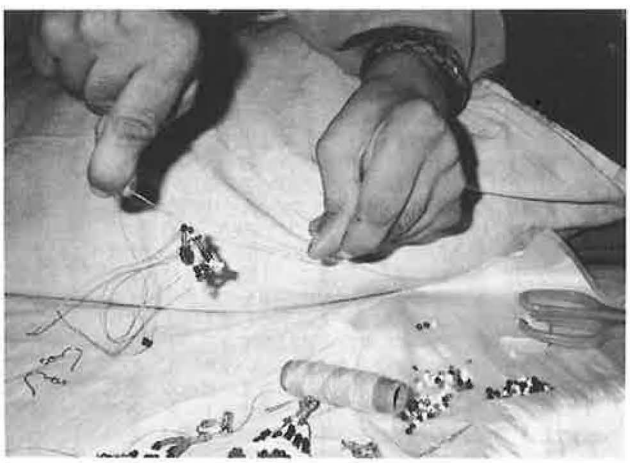
❖言葉で格闘

こちらでは、相変わらずことばで苦労しています。ウルドゥー語の語彙数がなかなか増えていかないし、時制や人称別による動詞の変化がうまく出てきません。この間も年配のスタッフに〝You should respect me!〟と叱られてしまいました。どうして怒っているのかと思ったら、言葉を省略して「めし、ふろ、ねる」みたいな言い方になっていて、まるで小間使いの少年に対するような態度だというのです。私の方は、もっと深刻な理由からだと思っていたので、ほっとしたり、心外だったり。でもやっぱりこれから気を付けて努力すべきでしょう。

「いつ、どこで、何を、誰が、する（しない）、はい、いいえ、良い、悪い」だけでなく、「なぜ、どうして」が言えないと、考えが違う場合相手にわかってもらえないし、そこがききとれないと、自分も相手のことが理解できません。自分が正しくても、間違っていても、ことばを使って相手と格闘していく気力と努力で、ことばを覚えていくのでしょう。その技術やエネルギーの点で、多民族社会でもまれている現地の人たちの方が、日本人より一枚上です。

❖ウルドゥー語とパシュトゥー語の狭間で

ウルドゥー語はパキスタンの国語ですが、北西辺境州で皆が話しているのはパシュトゥー語で、患者さん（特に女性）はパシュトゥー語しかわからない人が殆どです。中村先生からは、まずウルドゥー語をしっかり覚えて、それからパシュトゥー語にいかないと、どちらも中途半端になってし



ビーズの細工物を作る患者さん

まうと注意されました。しかし圧倒的にパシュトゥー語の世界なので、つい浮気をしてしまいそうです。文法自体は共通語のウルドゥー語の方が易しいそうですが、表現はパシュトゥー語の方が簡潔で気合いが入っているようにきこえます。例えば、

行きなさい　㋐ジャオー　㋑ザッ
黙りなさい　㋐チュプラホー　㋑チュプシャ

「今日は天気がいい。」は、ウルドゥー語では、「アージュ（今日は）　モーサム（天気が）　アッチャー（いい）　ヘー（です）」で、パシュトゥー語では「ヌン（今日は）　ハワー（天気が）　（カ）ハ（いい）（xha）　ダ（です）」です。私には、まだ話せないけど、耳できいた感じだけでなく、社会や文化のせいか、言葉自体が力強い感じです。

❖クナール出身のおばあちゃん

写真のおばあさんは、だんなさんも患者で、夫婦で一ヶ月入院していた人です。もとはアフガニスタンのクナール州出身で、戦争でパキスタンのパジャウルに逃れてきて、今はそこに住んでいます。他の女性患者が作ったビーズの首飾りをつけて写真を撮らせてもらいました。本人が「私は年寄りだからこんなのする柄じゃない。」というのを、「いいね。きれいだよ。」と女性軍がほめたら、「またあ、そんなこと言ってえ。」と笑っているところです。

理学療法中の患者さん

らいでは末梢の自律神経も損傷されて、血液の循環がわるくなったり、発汗作用がなくなったりして、皮膚が乾燥してヒビ割れし易くなり、キズをつくり易い手足になります。それで、水につけて皮膚を柔らかくして軽石で硬い角質をおとした後、油を塗ってマッサージして皮膚の状態を良く保つことが自分でできる治療です。

また、筋力低下をおこし易い筋肉の訓練も機能低下の予防になります。写真では、手の運動をしている間足を水につけてふやかし、最後に軽石でこすってきれいにした足に油を塗っているところです。このおばあさんは初め何かのゲームか遊びだと思ってやっていたとパキスタン人のスタッフが笑いながら教えてくれました。おばあさんたちには子どもがいなくて二人だけで住んでいるそうです。「私のところは山で早く冬が来る。家のニワトリや羊のことが心配だから。」といって帰っていきました。

❖患者さんは床屋さん

この写真は、床屋（ナーイー）の患者さんです。足のキズの治療のためにパラチナールという町からきました。入院中、一回二～三ルピー（一〇円位）で他の患者さんの散髪をしています。彼の手は完全な尺骨神経マヒで、左手は一・二指、右手は一・二・三指しか使えません。でも仕事中は殆どそれがわからない位に、障害のある手を使いこなしています。手順は、まず髪の毛を水で濡らして、頭の毛をそって、ひげをあたって、ひげの形をはさみで整えます。最後にブラシではらっておしまい。出来上がりに満足したかどうか、このお客さんは殆ど視力がないのでチェックしようがありませんでしたが、さっぱりしたと喜んでいました。

病院の庭で床屋さん

カラチまで
レントゲンの買出しに

JAMS事務担当　豊崎朝美

最近新しくオープンして見違えるほど奇麗になった、カラチの空港の中を、きょろきょろと見回しながら、昔の空港を思い出していました。今まで、飛行機の乗り換えのために三回程立ち寄った頃のカラチの空港は、薄暗くて、雑然としていて、その頃まだ旅慣れていなかった私は、言いようの無い不安を煽られたものでした。そんなもの思いに浸っていると、ふと、前を歩いているJAMSのマネージャーのヤコブの後ろ姿が、目に入り「あっそうだ、レントゲンの機械を購入するためにカラチにきたんだ。」と、現実の不安に引き戻されてしまいました。ヤコブとのカラチ出張は二、三日前にいきなり決まり、ヤコブも私も、カラチのレントゲンの機械を扱っている所を、知っている訳では無く、私は、「マネージャーがいっしょだからどうにかなるだろう。」と、不安を紛らわしながらカラチまできたのです。

レントゲン屋探し

カラチに着いた翌日マリーアデレイド・レプロシーセンターへ行き、中村先生からの手紙を渡すためにトーマス先生に会い、さらにレントゲンの機械を扱っている店を数軒紹介してもらいました。それから日本領事館へ行き、九月の上旬にシャワリ先生がイランからパキスタンへ戻って来る時、カラチでヴィザの問題で空港に拘束され、中村先生がカラチへいき領事館の協力を得て次の日無事解放された時の、お礼を述べ、そしてレントゲンの機械のことを尋ねてみました。「いまだかつて日本領事館にレントゲンの機械の店を尋ねて来た人は誰もいないんじゃないかな。」と、冗談を言いながら直ぐJETROに問い合わせて貰いJETROから三軒紹介して戴きました。

マリーアデレイド・レプロシーセンターと日本領事館で紹介された取り扱い店をその日の午後から一軒ずつ当たって行ったけど、思っていた以上、覚悟していた以上に、時間もエネルギーもかかりすっかり疲れてしまいました。まず住所をタクシーの運転手に見せてもよく知らない人が多い。知らなくて、知らないと言ってくれる人はまだいいほうで、知らなくても知ってると言って、変な所で降ろす悪徳ドライバーもいる。それでも中には、その辺に立っている人達に何回も何回も聞き回ってくれて、やっと探し当ててくれたドライバーもいた。そんなことで一軒の取り扱い店を探し出すのに最低一時間から一時間半かかり、それでも見つかれば良いほうでついに見つけ切れずに諦めた所もあり、やっと探し当てたら、既に潰れていたりとか、こういった具合で、ヤコブと二人でこの苦労は誰にもわかって貰えないとぶつぶつ言ってました。

それでも、その中の一軒で値段、品質とも、中村先生、シャワリ先生の希望に比較的沿うものがあり、注文を入れてきました。と、如何にも私が色々したようなことを書いているけど、実はヤコブが殆どの交渉等をしてくれたんです。言い訳を許してもらえるなら、こちらのイスラム社会では、男性が家族、親戚以外の女性に馴れ馴れしく話しかけるのは失礼なことで、私とヤコブが取り扱い店を訪ねていっても、店の人（全て男性）は殆ど私には話しかけません。それにヤコブは以前車の取り引き等のことで何回かカラチに来ていて、ある程度地理に詳しいので、私はヤコブの後ろに着いて回っていたようなものでした。

ペシャワールが懐かしい

こんな風にカラチの街を四日間走り回っていて、最初の一日、二日目は回りの様子が物珍しくてそんなに感じなかったけど、三日目頃からペシャワールが懐かしくて、早く帰りたくってしかたがありませんでした。否応無く目の中に飛び込んでくる、大量の人、車、建物、品物、等などに圧倒されてしまったのです。私にとってカラチの街はあまりにも大き過ぎて、そこから逃げ出したくなりました。だからペシャワール空港に着き、車で家に向かう途中、夕方だったこともあって、あまり車を見かけない道路を走りながら、ホッとすると同時に無性にうれしくなりました。

と、そんなこんなのカラチでの滞在を振り返ってみると、マリーアデレイド・レプロシーセンターでは建物の中を案内して戴いたり、何かと色々アドバイスして貰ったり、また日本領事館でも忙

しい中時間を割いて相談に乗ってもらったり、帰る時には、中村先生にと、朝とれたばかりの烏賊、蟹、海老、鯛、舌平目、等をダンボール箱いっぱい戴いたりと、皆さんに本当にお世話になった四日間でした。

強い陽射しの中 何時間も待つ患者さん

JAMS放射線技師　林　達男

アッサラーマ・レイコム、チトラスティー、ホーバスティ。ペシャワール会の皆様、お元気ですか。

私は一年ぶりのJAMSで大変感動しています。昨年は暮れに再度来るつもりが、私の不注意で体調をくずし、来ることが出来ず残念でした。JAMSのスタッフにも変化があり、新顔が多くなっています。知った顔がいないので、尋ねると、彼はダラエ・ヌールクリニックへ、またダラエ・ピーチクリニックへ等と返事が来ます。皆それぞれに活躍している様子がうかがえます。それもそうですね。三ケ所にもクリニックを開設しているのです。

ベースキャンプのJAMSでも毎回多くの患者が押しよせて来ています。私が帰国した一年間、女医のハシーナが一人で頑張って鍼治療を続けてたようです。特にペインクリニックを中心に治療活動を行ってたそうです。感謝です。

今は二人で治療を行ってますが、国情が違うので、男性の治療の時は女性が入ることが出来ず、女性の治療の時は男性が入ることが出来ず、大変不便でしかたがありません。外には多くの患者さんが待っているのにと気があせりますが、これも国情ですので、しかたないのですね。

しかし、こちらの人はよく根気強く待つものです。日の強い外で坐りこんで何時間も待っています。早く次の人を室内に入れてやりたいと思うのですが、前の患者さんが次から次へと痛みを訴えて、きりがありません。初めは腰が痛いと言うので腰を治療して、患者さんに、カムシュダ（軽減）と尋ねると、ホーバスト、ホーバストと言うので、こちらは気を良くして、ハローショー（終り）と言うと、頭が痛い、手が痛いと、どんどん続いて訴えるので、一人に三十分～一時間は早く過ぎてしまいます。それでも遠い所から来てるのだから納得のいくまで治療をしてやれば、次の人にすまないような気がして、申しわけなく思いながら、ついつい時間が過ぎてしまいます。

それにしても私の不在の間、ドクター・ハシーナがよくこれだけの患者を維持してくれたことに感心します。着いてまだ一週間ですが、女性の診療日が多くなったようです。やはり女性の患者さんの方が多いのだろうと思われます。一週間の勤務ですので報告らしい報告は出来ませんが、その内にアフガニスタン国内に、ダラエ・ヌールかダラエ・ピーチにも行って見たいものです。ドクター・シャワリの許可が出ればのことです。その時は良い報告が出来るように腕をみがいて待っています。皆様方の御支援により行われている活動ですので、充分な活動と、現地の人達に喜ばれる活動にしたいものです。それでは次回まで失礼いたします。

4年ぶりの日本の病院

ミッション病院看護婦
福岡徳洲会病院看護婦　藤田千代子

帰国して三ヶ月が過ぎた。久しぶりに日本の秋冬を、こんなものだったかなあと思いながら過している。福岡徳洲会病院に復職し、看護部の好意で、ペシャワールに行く前に在籍していた四階病棟へ配属された。なつかしい空気がフワッとおおいかぶさるような感じがした。

出勤一日目の申し送り時、耳馴れない専門用語が次々と耳に入り、めまいと吐き気を感じた。もし日本で仕事を再開するならば、外国へ行っても看護雑誌の定期講読をした方がいいだろうと考える。しかし時が過ぎて、体と頭がこの地に落ち着いて来ると、大切なものは何かがわかってくる。どこでも同じである。

ガラスの注射器がディスポーザブルに変わり、一回使用するごとに破棄するようになっていた。感染症やコストの問題など理由を聞けば、なるほどと納得するが、物を集める方だった側からする

ペシャワールのチャイハナ（喫茶店）

と捨てることに抵抗があった。

しかし業務の流れからして、棄てた方が便利であり、だんだん慣れてくる。よく友人から笑われるのだが、少ししゃれたカップに入っている菓子類を食べた後、そのカップが食器などに使えそうな気がして棄てられないでいる。湯水のように物があふれている日本では、やはりおかしいのかも知れない。

ミッション病院のらい病棟で、男性スタッフや男性患者と笑顔で接することのないようにするのが、初めは難しかった。と感じる位日本ではどの患者にも「ものやわらかく、笑顔で」ということが良いこととされ、そうでありたいと努力していたのだろう。

後でわかったことだが、パキスタンでは、女性が余計な笑顔で男性に接している時、媚(こび)を感じる。笑顔でなくとも、その人のためにやっていれば、わかってくれるのである。そこには、甘えの感情はどちらにもない。

熱をはかり、脈を数え、注射、点滴、傷の手当、その他……。処置に走りまわる。患者の顔をゆっくり見ることも少ないめまぐるしい忙しさの中で、患者さんへのサービスの向上が目標とされる。疲れきった友人たちを見ていると、サービスの向上の意味がわからなくなる。せまい病室にぎっしり入っている患者たちをみていると、幸せそうに見えない現実がある。

日本とペシャワール、どちらがどうなのかわからなくなる。

（藤田さんは、来年二月には再びペシャワールに戻ります。）

募　集

ペシャワール発
「共に歩む」ワーカーを!!

JAMSとミッション・ホスピタルでは日本からのワーカーを募集しております。ただし、現地は熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々の便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象：

1．医療技術者（医師、看護婦(士)、検査技師、理学療法士など)。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。

2．以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、日常英会話ができる者。

② ワーカーは、現地で1カ月、ペルシャ語またはパシュトゥ語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をしていただきます。

③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを負担します。

④ 目的を持った見学であれば拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。（繁忙期には断ることもあります）

詳しくはペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810　福岡市中央区大名1-10-25
上村第2ビル307号　ペシャワール会
電話　092-731-2372
092-725-3440〔分室〕

ヌーリスタンの渓谷(1)

〔インダルの園1〕

JAMSアフガン医療サービス顧問医師　中村　哲

＊隔絶された小世界

世界に「秘境」と呼ばれる地域が残っているとすれば、アフガニスタンのヒンズークッシュ山脈の奥深く、古代から隔絶されて存在する村々がその一つかもしれない。昨年新たに開設されたダラエ・ピーチ診療所の上流は、ヌーリスタン（光の国）という部族の居住地である。徒歩で険しい道を歩かねばならないので、下手の住民は殆ど寄り付かない。もちろん外国人はほとんど足を踏み入れず、完全な自給自足で、外界から隔絶された昔ながらの小世界を守っている。「ヌーリスタン」は、アフガン人の間でも独特の響きがあるらしく、下手のパシュトゥン住民は、なぜか彼らを畏怖の目で眺める。さしづめその感覚は、かつての日本の里人が「山窩（さんか）」を見る目に近い。

ものの本によれば、ヌーリスタンは一八九〇年代、アフガン王アミール・アブドゥル・ラフマンによってイスラム化し、かつての名をカフィリスタン（異教徒の国）と呼んだ。その一部はパキスタン北西辺境州の北部、チトラールの一部に連続し、カラーシの谷としてよく知られている。パキスタン側は現在すっかり観光地化して、安易な「民俗学的調査」の名所として荒れ果ててしまった。だが、これはヌーリスタン全体のごく一部であって、アフガニスタン側では逆に最も純真なイスラム教徒と化して、よそ者をうけつけない。その全容は知られず、民族の起源・歴史なども未だに謎のごとく語られ、たまに訪れた外国人が断片的な観察記録を伝えているだけである。原アーリアン人だとか、アレキサンダーの末裔だとか、様々な憶説があって、いやがうえにも興味をそそられるものである。

日本人では、一九五四年に岩村忍氏、一九六〇年代に京都隊、最近では内乱前（一九七六年）にカブールに居た松浪氏などが、ごく入り口の事情を断片的に伝えている。その他アフガン戦争中にクナールでゲリラの取材をした恵谷氏などの報告があるが、記述に誤りや誇張が少なくない。外国文献からの借用を取り混ぜて、現実と異なったイメージを与えているようである。

一方我々の方では、切実な医療上の問題で、次第に頻繁な住民との交渉が日常化して、どうしてもこの地域の中心部に駐留せざるを得ない事情が自然に生じてきた。ダラエ・ピーチ渓谷の診療所が開かれてちょうど一年、この山人たちとの付き合いを通して見れば、これを「秘境」と呼ぶには抵抗がある。一歩踏み込めば、彼らも人の子であることに変わりはない。もちろん、私が慣れてしまって違和感が薄くなっているせいもある。ヌーリスタン側では、このような神秘めいた憶説をよそ者が持っていることをよく承知していて、「我らこそアレキサンダーの子」と笑い転げながら語る。彼らにとってどうでもいいことで、ともかく生きるために必死というのが実情である。

＊「診療所開設」の陳情

さて、ヌーリスタン全体は大きくは四つの谷の地域に分かれ、それぞれ言葉も異なる。我々が関わりをもったのは、この両側の「ワマ」という地域である。JAMSの診療所から三時間ほど歩くと、山人と里人の住み分けの限界地点で、最初のヌーリスタン人のゴーサラク村が現れる。この渓谷ぞいのヌーリスタン西方地区全体から、我々の診療所にまれならず重症患者が運ばれてくる。中には数日かけて患者を搬送するものもあり、その途中で絶命する者が後を絶たなかった。

私とJAMSスタッフの多くが彼らの困難な事情に同情しているところ、山人の長たちの方から度々「診療所開設」の陳情と依頼が来るようになった。確かにらい患者も多数いるという話もあって、今年十月にJAMSのスタッフ七名を引き連

れ、山の住民たちを先導に医薬品を担がせ、十日をかけて診療所開設の可能性を探りに行った。医療活動から少し外れるが、いくつか現地の事情を紹介してみよう。

*まる一日の強行軍

ダラエ・ピーチ診療所からまる一日、渓谷に沿って歩き続けると、「ワマ」という西ヌーリスタンの心臓部に至る。標高三〇〇〇メートル以上、ちょうど宝満山程度の勾配をいくつか連続して越えるものと思えばよい。谷は次第に深く急となり、平地は少なくなってくる。樹木は数を増し、日本の山奥の光景によく似てくる。谷を吹き上げる風は上昇気流を作って、殆ど夕立に似た雷雨が毎日訪れる。そのため下流域の埃っぽい乾燥した空気は、一変して適度な湿気を帯び、すがすがしい気分を与える。ぼんやり歩いていると、日本に戻って来たような錯覚に囚われる。道らしい道はないが、住民は軽々と岩を飛び流れを渡って、すさまじい早さで歩く。彼らの「すぐそこ」は、我々にはおよそ一日行程のことを言うらしく、我々の速度は彼らの半分と考えておれば間違いないようである。到着するころには、屈強な筈のわがスタッフも、二、三〇キロ近くの荷を担いで、まる一日の強行軍に辟易し、全員足の痛みを訴えて、事実上へばってしまった。

「止まれ！　五日間ここに滞在して調査。」と私が伝えると、みんなマメだらけの足をさすりながら、顔が輝いた。それもそのはず、予定では毎日同距離を連続五日歩くことになっていたので、この強行軍が延々続くものと思って意気阻喪していたらしい。私の方では、部落がまばらに散在するので、むやみに川沿いを歩いてもまともな見聞はできないし、それにワマがその中心部であるから、そこを拠点とする各支流の村々を徒歩で訪れる方が実際的な距離感が摑めると思ったのである。さらに、スタッフたちの心理状態を考慮すれば、「この先まで『診療所』を作られて派遣されては適わぬ」という思いにかられて士気も落ちよう、と考えたのである。

一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワール・ミッション病院に赴任。らいのコントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わると共に一九八六年JAMS(ジャパン・アフガン・医療サービス)を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創設をめざしつつ現在に至る。現在JAMSは一つの病院と三つの診療所を設置して、アフガン人の無料診療にあたっている。
著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』(石風社)『アフガニスタンの診療所から』(筑摩書房)『ペシャワールからの報告』(河合文化研究所)がある。

●事務局だより

＊〔お礼〕悪性マラリア流行に対する緊急アピールに応えて、約一七〇〇件の寄金が寄せられました。私たちの予想をはるかに越えるもので、有難く深く感謝します。これによって、現地マラリアチームが、二次、三次と治療・投薬を続け、最悪の事態は回避されました。

今回は、会報だけでなく、新聞・テレビ等でも広く全国に呼びかけましたが、個人だけでなく、職場・学校・地域で自発的にアピールを広げていただいた方が多数あり、より深い反響がありました。

＊〔おわび〕また、合計千本を越える問い合わせの電話で、事務局も混乱寸前の天手古舞で、礼状・領収書発送の遅延やミスが発生しているかと思います。疑問の点は遠慮なくお申し出下さい。（専従者はおりませんので、ボランティアで準専従体制を組んでやっております）。

＊〔お願い〕今回の「マラリア・キャンペーン」で、私たちJAMS＝ペシャワール会の活動を知られた方もあるかと存じます。会報や中村医師の著書をお読みいただければおわかりのように、悪性マラリアの流行は、現地の抱える問題の「氷山の一角」に過ぎません。これを縁に現地プロジェクトへの理解と継続的なご支援をいただければ幸いです。

＊JAMS代表のシャワリ医師のインタビュー（NHK・ETV8「アジアからの発言」）は、自国語（ペルシャ語）での発言だっただけに、格調高い内容でした。スペインへ脱出するつもりが中村医師との出会で、祖国復興に向け、JAMSを設立した経緯も感動的でしたが、彼が、アフガンから見ると、「日本は平和のシンボルだ」と発言した時には、いつも「エコノミック・アニマル」と指弾される日本人の一人としていささかショックでした。

〔ペ村から〕

※字が下手な私は、宛名書やお礼、年賀状等々が大嫌いで、ワープロが心の友だったはずなのに……なぜこんなことになってしまったのか。

でも慣れってコワイ。頭の上を飛びかうジョークをBGMに、ボールペンの滑りは快調。いつも果てるかもしれないハガキの山に今日も挑んでいます。あまり上手とは言えない字で、しかも修正液で失敗したお礼状があなたのところに届いたら、それはきっと私です。

（れ）

ダラエ・ヌールへの道
——アフガン難民とともに
中村哲　四六判上製三二六頁　定価二〇六〇円
ひとりの日本人医師が、現地との軋轢、日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何か、を根底的に問い直す渾身のメッセージ
石風社　福岡市中央区大名一―二―十五　電話　〇九二（七一四）四八三八

ペシャワールにて〔増補版〕
中村哲　四六判上製二六〇頁　定価一八五四円
石風社　福岡市中央区大名一―二―十五　電話　〇九二（七一四）四八三八

アフガニスタンの診療所から
中村哲　B6判並製二〇〇頁　定価一一〇〇円
筑摩書房　東京都台東区蔵前二―六―四　電話　〇三（五六八七）二六七〇

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。

役員の改選は毎年総会にて行う。

⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑨本会の事務局をFARA HOUSE（〒八一〇　福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル三〇七号　☎七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810 福岡市中央区大名1丁目10-25 上村第2ビル307号　毎週水曜日夜七時例会
☎・FAX (092) 731-2372　郵便振替 福岡9-6559　〔分室〕☎・FAX (092) 725-3440（石風社内）
発行日 1993年12月25日 No. 38　会長 問田直幹　事務局長 村上 優